

かがやく

日本語の
悪態

かがやく^{にほんご}日本語の悪態^{あくたい}

1997 © Hiroshi Kawasaki



著者との申し合せにより検印廃止

1997 年 5 月 26 日 第 1 刷発行

1997 年 6 月 18 日 第 4 刷発行

著 者 ^{かわさき ひろし} 川崎 洋

装丁者 東 幸央

発行者 加瀬昌男

発行所 株式会社 草思社

〒 150 東京都渋谷区神宮前 4-26-26

電 話 営業 03(3470)6565 編集 03(3470)6566

振 替 00170-9-23552

印 刷 株式会社 精興社

カバー 株式会社 大竹美術

製 本 大口製本印刷株式会社

ISBN 4-7942-0755-7

Printed in Japan

日本音楽著作権協会（出）許諾第 9704725-701 号

かかやく

日本語学院図書館
悪態 章

川崎洋

まえがき

悪態、つまり悪口です。文字通り「悪い口」です。馬鹿とか阿呆なんていうのがまず思い浮かびます。ほかにどんな悪口をご存じでしょうか。年齢、性別、職業、あるいは育った地域によつてさまざまでしょう。でも相手に悪口を言おうとするとき、言葉がつぎからつぎにスラスラと口から出てくるでしょうか。なかなかそうはいかないのではないかと思います。わたし自身この本を書く前はそうでした。

ふつう背の高い人を囁くとき「のっぽ」とか「電信柱」とか言いますが、大分の方言を調べているとき「お月様ん油さし」という言葉に出会いました。月に油をさすほど背が高いというわけです。月に向かって伸びているヒトを想像する絵のようなイメージがあつて、とても感銘を受けました。わたしは「お月様ん油さし」のような言葉もふくめて、悪態を広くとらえ、そのうえでいくつかの切り口からまとめてみようと考えました。

まず一口に悪態といっても、その表現自体は、あざけり、罵り、脅し、毒づき、からかい、けなし、そしり、冷やかし、当てこすり、皮肉、批判、囁し、なぶり、嫌み、憎まれ口、しゃれ、まぜっ返し、あげ足とり、啖呵、軽蔑、陰口、卑下、自嘲、卑しめ、さげすみ、差別語、捨てぜりふ——とさまざまです。一方、悪態は大きく実用と遊びに分けられます。赤穂浪士は吉良邸に討ち入

りの際、短めの槍を手にしました。建物内での使い勝手を考えてのことです。この場合、槍は相手を殺傷することを目的とした武器でした。一方、陸上競技のやり投げの槍は飛距離を競うスポーツ、大きくとらえて言えば「遊び」です。悪態もこれにたとえることができます。たとえば差別語は相手を傷つける言葉です。これはただ「悪い」だけの忌まわしい言葉で論外です。

わたしが特に魅力を感じるのは、言葉遊びの要素の入った悪態です。夏目漱石の『吾輩は猫である』の中で、先生が夫人を「オタンチン、パレオロガス」と言つて罵る場面があります。これは東ローマ皇帝のコンスタンチン・パレオロガスをもじった、漱石の言葉遊びによる悪態です。オタンチンと言うより、ずっと面白く口にし甲斐のある悪態です。悪態には、擬声語・擬態語のように、意味より音声の響きに重きをおかれる一面があります。もともと言葉は意味だけでなく、音声そのものが大きな力となります。最近、住友生命保険が一般から募集した「創作四字熟語」に、なかなかの作品がありました。厚生省の汚職事件や官官接待への怒りをこめた「高官無恥」「暴飲忘職」なんていうのは、立派な悪態です。厚生省の馬鹿野郎と叫ぶより、ずっと鋭い皮肉をこめた活き活きとした怒りの表現と感じます。言葉遊びとしての言葉の力です。

次に、言葉はそれがどういふ場面で発せられたか、文脈のどういふ位置で使われたかによって意味合いが違ってくるということです。「あの人は頭がいいよ」にしても、時と場合によっては悪口になります。反対に「馬鹿」にしても、女が愛する男に耳元でささやくそれは、絶対悪態ではありません。

それと、自分自身に対して悪態を吐くという場合もあります。考え事をしていて、上りの電車に乗るはずが下りに飛び乗ってしまい、しばらくして気がつき、

「またいつもの十八番^{おはこ}をやりやがった、このストコドツコイのウスラトンカチめ！」

と自分自身に毒づくことがあります。この場合、手持ちの悪態語をいっぱい持っているほうが、腹立たしさを存分に託すことができるというものです。

あるいはまた、友人と共通の友人の悪口を言いながら飲む酒はうまいというのは動かし難い事実です。

「やっこさんの、ああいう自己顕示の行動というのは、おれはこっぱずかしくてできないね」

「そうだ、そうだ。やつはおれたちとは人間のできが違うってことだよ、おーいビールもう一本！」

なんていうことになります。この活き活きとした言葉の躍動ぶりをマイナスの面からだけとらえていいものでしょうか。悪口を言う時って自分が裸になります。その悪口に嫉妬が混じっていれば、その人がどんな劣等感を持っているかが明らかになります。つまり悪口を介してお互いの腹の底を見せ合うことになるわけで、またその分親しさも増すというわけです。こういう一面にも注目したいと思うのです。

この本では、落語、遊里、芝居、映画、文芸、方言、キャンパスの中で使われている、わたしがこれは！と思う悪態を選んで採録してあります。それらの中には、本当に活き活きとしていて歯

切れのよい悪態、洗練されていてイメージをふくらませるような悪態がたくさん息づいています。

こうして並べて通して読んでみると、昔は日本語の話し言葉や書き言葉の中に悪態のダイナミズムが豊かに波打っていたなあと感じないではいられません。ところが、大げさに言えば悪態語という日本の文化が戦後消滅の一途をたどり、悪口も言えず無言のまま刃物でブスリという野蛮な手合が増えました。キャンパスの悪態については、言葉遊びふうのユーモラスな表現が見られますが、語呂合わせや短縮形のそれが多く、時代の流れということなのでしょうが、当方が思わず小膝をたたいてにつこりするような逸品は少ないようです。

そこでわたしの提案。

「お互いユーモアのセンスを磨き、悪態能力を高めよう！」

目次——かがやく日本語の悪態

まえがき 3

第一章 落語に息づく悪態 9

第二章 遊里を彩る悪態 63

第三章 芝居・映画・文芸に見る悪態 87

第四章 方言に表現を得た悪態 133

第五章 現代キャンパスに飛び交う悪態 189

あとがきに代えて 211

さくいん 214

第一章 落語に息づく悪態

ほとんど悪態が出てこない落語もたくさんありますが、総じて、もし落語の世界に悪態というものがなかったら、世の中から花が姿を消したみたいに、どんなにか寂しいことでしょう。ここでは東京落語・上方落語の中に息づいている悪態の諸様相を、それがどんな場面で使われているかについて紹介しました。

わたし自身、中学一年生のとき、海洋訓練に行った先の漁村の、級友や村民の前で一席やったくらいの落語好きなので、書いていて力が入りました。

薄のろめ／コン畜生／裏表のはっきりしねえ顔だね

「うなぎ屋」という落語があります。二人の男A、Bが連れ立って開店したばかりのうなぎ屋へ行くことになります。Aは先日この店で、ただでいっぱい飲むという思い掛けないシメコのウサギにありつきました。その時うなぎ裂き職人が用足しに出かけて留守だったため、丸焼きのうなぎが出てきたりして、それに腹を立てていると、店の主人がやってきて無調法を詫び「きようはご勘定をいただきますから、このままお帰りくださいまして、改めて近日おいでを願います」

という次第でした。それがたつた今Aがうなぎ屋の前を通ると、またうなぎ裂き職人がいません。それでまたただ酒をせしめようと、Bを呼び止めたのです。その折りの会話です。

「おい大将、こつちを向きなよ。友だちが声をかけたらこつちを向くがいいじゃねえか。黙ってつつ立ってゐない、薄のろめ……こつちをお向きよ。顔だけでもいいからこつちを向きなよ。友だちに途中で会って声をかけられたら、どうしたって顔ぐれえ向けるなア当たり前前じゃねえか……こつちを向きなよ」

「向いてるよ」

「なに？」

「さつきからこつちを向いているんだよ」

「あッ、コン畜生こつちを向いてやがる……てめえの顔を初めてゆっくり見るが、裏表のはっきりしねえ顔だね」

「兄貴、口をきいてるほうが表だよ」

さてうなぎ屋には目算通りうなぎ裂き職人はいなくて、しかたなく店の主人がうなぎを裂こうと一匹つかまえますが、指の間をぬるりぬるりと上へ抜け、そうさせまいと、とうとう店の外へ。どこへ行くんだい、と声をかけると、

「すみませんうなぎに訊いてください」

というオチで終わります。

——五代目三升家小勝（二八五八〜一九三九）

いくらか洒落しゃれの分かるような馬鹿

「道具屋」は大家にすすめられて、がらくたを売る道具屋を始めた与太郎の、客とのやりとりがどうしてもはなしいじらしいですが、次はその出だしです。

「エエ『道具屋』というはなしを一回申しあげます。しかし、このはなしの材料には、いくらか変わった人物が出なければ、まとまりが付きません。あまり馬鹿でもしょうがない……いくらか洒落の分かるような馬鹿を相手どるという……こういうのが出てますと、趣味がごいます」

人につき合っていて、何が味気ないといって、洒落が分からないくらい味気ないものはありません。いくらかでも洒落が分かるという程度でさえ「馬鹿」だったのですから、昔は今より人間の質のレベルは高かったと言えるのではないのでしょうか。昨今は洒落がまったく通じない利口がうじゃうじゃしていて、実に暗澹あんたんとした気分です。

——同右

馬鹿々々しく強情ツぱりでもって、なまいきでもって、
空威張りに威張るけれども、意気地なしでまぬけで

「たぬき」は、子どもにいじめられていたところを、子どもに金をやって助けてくれた男のところへ恩返しにきた子だぬきが、男の頼みで紙幣に化けたり、サイコロに化けて男の望み通りの目を出したりする噺ですが、初め夜、子だぬきが男の家へやってきた時、男にこう言います。

「おっかあが神通力で見るとえとね、馬鹿々々しくこの人は強情ツぱりでもって、なまいきでもって、空威張りに威張るけれども、意気地なしでまぬけでエ、しょっちゅう貧乏してるってことを、おっかあが調べた」

「なんだア？　へんなことを調べやがるじゃねえか、よけいな事ツた」

「だけでもこの人は困ってるから、いま恩返しに行つてやる方がよからうツてン……それでやつて来たんだ」

恩になった当の相手を前に「馬鹿々々しく……」と悪口を言うところが落語の落語たるゆえんで、悪態がかがやいています。

噺の方は、サイコロに化けた子だぬきに、男が符牒ふちようで出て欲しいサイコロの目を伝えてうまくいくのですが、最後に五の目を出させようと、

「天神様の、梅の鶯うぐいすの天神さまア頼むよ」

と打ち合わせからはずれた符牒を口にしたので、こんがらがった子だぬきは、冠をかぶって笏しゃくを

持った姿で現れて万事お終しまいとなります。

——初代柳家三語楼（一八七五—一九三八）

ずいぶん長い顔だね、馬が紙くずかごをくわえて、シルクハットをかぶったようだね

「縮みあがり」という噺は、日蓮宗のお会式えしきで子どものお礼詣りにやってきた男ABCが、Cが費用を全部受け持つというので、喜んで三人して女郎屋に上がるという筋書きです。三人出てきた女郎が挨拶をして引き下がっていきますが、それを見送った一人が、

「おいおいごらんよ。どうだいあの一番あとから出て行った女を。ずいぶん長い顔だね、馬が紙くずかごをくわえて、シルクハットをかぶったようだね……」

と言います。長い顔と言え、八代目桂文楽は別の噺の中で、

「馬が円行燈まるあんどんくわいて、下へ鰻をぶらさげたような長え面で、上見て真ン中見て下ア見てるうちに真ン中忘れちまう」

と評していますが、どうもこちらの方が比喻としては一段上のようです。

さて、噺はCが待つ部屋へやって来たお熊が、

「よさねえかッてばことふと（人）は、ほんのうそれどこの事ことンではねえがんす」
とひどい田舎なまり。

「もしもしお熊さん、いったいおまえさんの郷里くにはどこだい？」

「おらが郷里かね、越後の小千谷おぢや（有名な縮み織りの産地）だがのんす」

「小千谷だ？ あつそれでわたしが、縮みあがつた」

というオチで終わります。

ところで、落語にはこうした「田舎なまり」が出てきますが、これは「落語国の田舎弁」といつて、ある雑誌の鼎談で柳家小三治さんから聞いたのですが、

「これは、どこの方言と特定できない、聞いているお客が、あ、これは自分とこの郷里の方言ではない、と思うような言葉です」ということなんだそうです。

——八代目桂文治（一八八三—一九五五）

べらぼうめエ／ふざけやがってこの野郎

「まんじゅうこわい」は、落語を聴く人なら特によく知っている噺です。休みの日に若いのが集まり、馬鹿ツ話をして一日遊ぼうということになります。何がきらい、こわいかという話になり、めいめいナメクジがこわい、ヤモリがきらい、おれはオケラ、イタチ、さらには馬がこわいとわいわい言っている中で、そっぽ向いて煙草のんでるのがいます。それへ、

「おい八つあん、こっちへきて仲間へ入んねえ、おめえは何がこええ」

と聞くと、

「いま聞いてりやアなんだと、蛇がこわいの蛙かえるがこわいのなめくじがこわいのと、べらぼうめエ子どもじゃアあるめえし、あんまり馬鹿々々しいや、人間は万物の霊長というじゃアねえか」

と威張ります。しかし、八つあんにもひとつだけきらいなものがある。実はまんじゅうがこわい、と言います。

「あア話しているうちにだんだん心持ちが悪くなった」

と言うので、隣の三疊の部屋で横になれといわれ、引っ込みます。早速一人がまんじゅうを買ってきて、部屋にそつと入れます。それに気づいた八は、こわいこわいと言いながら次々に口に入れたりふところに入れたり。いっぱい食わされたと怒って、

「ふざけやがつてこの野郎、てめえそのまんじゅう食つてやがるじゃアねえか、それで何がこええんだ」

「今度はお茶が一ッぱいこわい……」

——四代目柳家小さん（二八八八—一九四七）

この馬鹿ッ。おまいぐれえの馬鹿は少ウしばかりの馬鹿じゃアねえな、えゝ？ 馬鹿ア慢性だ

「かぼちゃ屋」という噺は、おじさんに教えられて、かぼちゃを天秤棒で担いで売り歩いた与太郎が、

「みんな売れちゃったよ、ほォら。籠は、からっぽだア」

と帰ってきます。おじさんは感心しますが、何と全部元値で売ってきてしまっていて、儲けはなし。おじさんから「売るときは上を見る（元値に儲けの分を加算しろ）」と言われたので、空を見たとの与太郎の返事に、おじさんは、